

雨の日

鈍子 譯

花子さんは今日こそ折角摘草に出かけやうと思ふてゐましたのに、人の心も知らないで、春の雨が降つてゐます。それがシヨボシヨボとふる位ならまだ可愛らしいのですが、音をたて、ザアザアとやつてゐます。花子さんは窓の前に立つて、お鼻で窓硝子を押しつつ、イヤな雨ツたらないとつぶやいてゐるのですが、外は風のお手傳もあるのでザアザアバラバラとやかましい雨の音、太郎さんの鼻聲なんか誰れも聞き手はわりませぬ。イヤだイヤだ、ヤアだアと花子さんは泣き聲になりました。そして……コツンリ知らしてあげます。が子……大きな涙が、外の雨にもまけないと云ふ風に、窓硝子の上を轉けて來ました。見てゐらつしやらないだらふと思ふてゐた祖母さまは、ついそれを御覧になりました。祖母さまはいつでも花子さんのお困りの時、チャントそれを御存知なんです。オヤオヤオヤ、内も外も大雨だよ、どうせ

うかしらと、祖母さまは仰せられました。ト見るとめがね越しにこつちを御らんになつてゐるやさい御目、ハット思ふて花子さんは大急ぎで涙を拭ふて仕舞ひました。泣かないやうに我慢して、元氣つけた聲で……でもまだ鼻聲でした……だつて祖母さま、日曜に雨がふつてゐるんですもの、私、何ンにも出來やしない。昨日の朝、買ふてきた本を讀んだらい、でせう。私よんで仕舞ひました。もう一度讀んで御覽。私二度讀みました。ジャア輪を廻して御遊び。私は棒をなくして仕舞ひました。ソレではしかたがないよ、おまち、こうつと、祖母さんと二人で遊びませうよ、御前は店をだすまねをするがい、私は貰うお客様になりませう。

花子さんは、祖母さまと遊ぶこと大すきでした。こんな御話があつたので、モ一雨のことなんか忘れて仕舞ひ、そこら中をかけ廻つて、店の品物になるやうな、本やら小箱やら、お小皿、糸巻、紙きれなどを、机の上にならべました。鉛筆を耳にはさんで、帳面をくりひろげてゐるのは、花子さ

んの番頭さんです。祖母さまは店の前に腰かけてお客様のまねをします。

ぬらつしやいまし、結構な御天氣でございます、何をさしあげませうか。ホンニい、天氣ですぬ番頭さん、わたしは色々ほしいものがありますが無類先づ、お砂糖はありますか。ハイございます無類飛切極上等と云ふところで、ソレでいかほど差上ませうか。サウネ一寸と五尺六寸ほど。

太郎さんは可笑しくなりました、けれども御客様だから笑つてあげるわけにゆきませぬ。

失禮ですが、手前店では、お砂糖を尺で賣ることはございませんで、へー。オヤさうかへ、それではどう云う風に注文しやうかしら。へー、一斤二斤と云う風に御願するのでございます。ハハアさうだらふネー、それではどうかお砂糖を五斤ほどソレから醋を三斤ばかり。モシ奥様、手前店では醋を斤でさしあげかねます、まことに御氣の毒さまでへー。さうかナア、醋はどう云ふ風に賣るつもりか。ハイ一升二升と云ふ風に御願するのでございます。なるほどその筈だネ、ソレでは醋を三

升と、外に雞卵を六升ほど。太郎さんは可笑しさをこらへて。

奥様、卵は一ツ二ツと算へますので、十二個は一ダースと申すのでございます。其筈其筈、ではね雞卵半ダース、ソレからお米を二ダースばかり。太郎さんはとうとこらへがたくなつて笑つて仕舞ひました。はやお客様の格も番頭の格も崩れて仕舞ひ。

アラ祖母さま、お米の二ダースはひどいぢやありませんか。まさか粒の十二粒でもないでせうし、さりとして俵の二十四俵でもないでせう、ハイお客様に申上げます、手前店では一斗二斗と云ふ風にお米を算へまして、四斗入が一俵なんでございす。祖母様は落ついたもの、御手元は編物に急がしくてゐますが、目がね越しに、太郎さんの顔を一寸と見て、真面目にお客様となつてゐます。なる程なる程、私としたことがサツバリ勘定がわからないのネ、イヤ番頭さんの御かげで物を覚えしましたよ、ではネお米は三俵として、序に赤いリ

ボン二儀とオリーブ色のリボンを三斗五升ばかり下さいな。

太郎さんはとうと笑ひ崩れました、腹を抱へてつ

いけさまの高笑ひ、とうと涙までこぼしてゐます

オリーブ色のリボン三斗五升とは誰れでも笑はず

に居られませぬ。

丁度その時、雨が晴れて、日の光うるはしく、ま

ことにいゝお天氣となりました。

祖母さまは半分はお客さま半分は本當の祖母さま

でニツコリしてゐます。

サア花子や御前は外へで、遊ぶによくつたよ、

ホンに忘れてゐた、番頭さん注文の品々すぐ小僧

さんに届けさして頂戴。祖母さま、イヤお客様、

今度また雨がふりましたら、御届いたしませう。

どうか頼みますよ、ア、面白かつた、御前の御か

げで、雨のことお忘れてしまつたよ、御前の笑顔

のいゝお天氣は、祖母さん何より大好だのだよ。祖母さんはこう仰つしやつてニツコリなさいました。花子さんは。ソレではネおばあさま、今度ど

のませうと申しました。(終)



童話と云へば桃太郎や浦島の様なものばかりの様に思はれて居ますが斯る物語様のものばかりでなく右の様な叙事的の事も時には興があらうかと思ひます。讀者は之に對して兎角の御意見あらば御腹藏なく御發表あらんことを望みます。

